

テレビと視聴者の物語共同体 —少年事件報道のマルチモダリティ分析を通じて—

Narrative Community of Television and its Watchers: Through the Multimodality Analysis of TV Reports of Juvenile Crimes

酒 井 真由子
Sakai Mayuko

加 藤 隆 雄
Kato Takao

要 旨

テレビが想起と忘却のメディアであることをふまえ、テレビ番組が声と映像によっていかに視聴者の想起を誘い、そこにいかに物語を差し挟もうとするのかについて、少年事件報道をもとに分析した。想起について、プラトンとフィスクラの説を検討しながら、パラディグムと痕跡によって構成されている「記憶」という空隙に挿入された物語は、M・アルヴァックスの述べる「集合的記憶」として作用している。これによって、テレビが視聴者と取り結ぶ関係は、「物語共同体」と呼べるものになっていることを論じた。

キーワード：物語共同体、視聴者、少年事件報道、忘却、想起の儀礼

1. 再現前＝想起／現前＝声・映像に対しての再現前＝声・映像

プラトンの『パイドロス』では、その結末近くで、文字と記憶についての議論がなされる。パイドロスに向かって、ソクラテスは、エジプトの地方の神テウトと王様の神タモスとの対話のエピソードを紹介する。テウトは、自身の発明した文字というものがエジプト人の知恵を高め、記憶をよくすると述べる。これに対して、タモスは次のように述べるのである。

人々がこの文字というものを学ぶと、記憶力の訓練がなおざりにされるため、その人たちの魂の中には、忘れっぽい性質が植えつけられることだろうから。…彼らは、書いたものを信頼して、ものを思い出すのに、自分以外のものに彫りつけられたしるしによって外から思い出すようになり、自分の力によって内から思い出すことをしないようにな

るからである。じじつ、あなたが発明したのは、記憶の秘訣ではなくて、想起の秘訣なのだ⁽¹⁾。

(プラトンの語る) ソクラテスは、ここで「ムネーメー (μνήμη) = 記憶」が文字に対して優位であることを語るのである。記憶とは知恵を与えるものであるが、文字は知恵を与えるものではなく、博識家という外見を与えるものに過ぎない。文字は記憶の力を損ない、忘却していた事柄を再び現前化するにすぎない「アナムネーシス (ἀνάμνησις) = 想起」の装置なのである。

同じ想起 (アナムネーシス) という語を用いて、カルチュラル・スタディーズの研究者であるジョン・フィスクとジョン・ハートレーは、テレビの機能を分析している。テレビの警察ドラマの冒頭のクレジットが果たすのが想起の機能だというのである。あるショットが、視聴者がすでに知っている警察ドラマの類似のもの^{パラダイム}の系列 (paradigm) を想起させる。「われわれはすでに見たことがあるはずの作品を気づかせられ、いまから見ようとしている作品もこれまでのと同じように満足できるだろうとを感じる。」⁽²⁾

文字を想起の装置とするプラトンと、テレビ番組に想起の機能を見ようとするフィスクらとの間には、メディアの単なる発達以上のものがある。現前を真なるものとし、再現前を偽りのものとするプラトンの主張は、すべてが再現前であるような (あるいは再現前に取り囲まれた現前がすでに現前としての意味を失ってしまった⁽³⁾) マスメディア環境にあつては、もはや存在すべき場所をもたないように思われる。

プラトンの観点からすれば、声と映像は、現前としての資格を有する。ところが、テレビにおける声と映像が、フィスクらがいうように想起=再現前の機能をもつとしたら、それらはプラトンのいう文字の役割を果たしていることにならないだろうか。ただし、このことから、マスメディアは、現前でも、文字としての再現前でもなく、文字の機能を果たす声と映像による「擬似現前」だと結論づけてしまつては、想起に注目した意義は失われてしまうことになる。テレビにおける声・映像が文字=再現前の機能を果たしているとしたら、それでは文字の方はテレビでどのような役割を果たしているのかについて明らかにしなくてはならないからである。

ともあれ、テレビにおける声・映像は、現前のようにみえて想起である。本稿がテレビデータの分析で明らかにしようとするのは、このような再現前=想起がどのような性格を持つのかについてである。

2. 共時的想起と継時的想起

文字やテレビが想起の装置であるというときに注意しなくてはならないのは、想起の装置とはすなわち「忘却=アムネシア (ἀμνησία)」のための装置でもあるということだ。プラトンが非難したのは、外にあるしるしからしか思い出せなくなつてしまった状態としての忘却についてであったとみることもできる。忘却は、声・映像=現前と想起=再現前との間に起こると同時に、想起=再現前と再想起=再々現前との間でも起こる。

フィスクらがテレビ番組に想起の作用を指摘したときに、忘却の作用は考えられていなかった

た。彼らが「^{パラディグム}類似のもの系列」という語を用いるとき、想起の説明として考えられているのは「換喩 (metonymy)」あるいは「提喩 (synecdoche)」の作用であると思われる。換喩とは、Aを示すのにAと隣接関係にあるBを用いる比喩の方法であり、王冠で王様を、ペンで文筆家を示すのがそれに当たる。提喩は、部分で全体を示したり（鳥居で神社を、「ご飯」で食べ物全体を示す）、全体で部分を示したりする（「白いもの（が降ってきた）」で雪を、「漱石（を読む）」で『坊ちゃん』を）やり方である。ある場面映像により、隣接する別のものを想起させたり、それが属する全体を想起させたりするのであり、想起される類似のイメージ全体がパラディグムと呼ばれるのである。マスメディアのこうした間接的な呈示は、フィスクにも依拠しているロラン・バルトによって共示義 (connotation) の問題として分析されている。「ハト」は文字通り公園などにいる野鳥としての意味（直示義denotation）を持つが、ある前後関係におかれた場合「平和」というメタレベルの意味＝共示義を持つ。ある前後関係を付与することによって、メタレベルの意味を喚起することが、バルトのいう「神話作用」⁽⁴⁾ に他ならない。これらと同様に、直喩や隠喩も現前するもの（声・映像）から非現前のものを想起・喚起させることができる。

しかし、プラトンが非難した想起の問題は、時間に関わる想起であり、忘却の問題を含んでいる。忘却について多くの示唆を与えるのが、フロイトの短いエッセイである「マジック・メモについて」である⁽⁵⁾。マジック・メモ (Wunderblock) とは、蠟板 (ワックスシート) にセルロイドとパラフィン紙からなるカバーのついた装置 (一種の玩具) であり、セルロイドシートの上からペンで文字を書くとパラフィン紙上に文字が残るが、シートをめくことで文字は消えるので、改めてシートを蠟板に粘着させれば再び文字を書くことができるようになる。フロイトはこの装置を、無意識を説明するモデル (比喩) として取り上げている。第一層＝セルロイドシートは刺激保護、第二層＝パラフィン紙は意識と知覚、第三層＝蠟板は無意識に対応する。この短いエッセイにおける比喩にすぎないモデルが、多くの著者から言及されるのは、文字と無意識との関係が多く含意とともにきわめて印象的に示されているからである。意識としてのパラフィン紙は、実際には何かが書き込まれるわけではない。これに対して蠟板は、常に書き込まれ痕跡を残す。けれども、蠟板自体には何も文字は残らないのである。蠟板は、記憶の媒体ではない。しかし、書き込まれた記憶＝痕跡を残すのである。

こうしたモデルを用いて忘却を考えた場合、テレビにおける声と映像が想起させようと働きかける相手は、痕跡に他ならない。痕跡は記憶ではないため、想起させられる記憶内容そのものは、テレビの側が補ってやることになる。ここに、加工された物語が提供される契機が生じる。

著者たちは、テレビの教育報道において、ここでいうところの神話作用を通じて世論形成がなされていることを別稿で論じてきた⁽⁶⁾。それは、事件の忘却と想起のサイクルを通じてヘゲモニックな物語が形成されていく有様である。このような観点から以下では、テレビの教育報道、本稿では特に少年犯罪事件の報道がどのようにして想起の装置を作動させているのかについて、データを用いながら明らかにする。少年犯罪事件を取り上げるのは、それが教育報道と

して視聴者を有識者として強く関与させるからであり、事件がある程度の期間をおいて生じていることから想起の特徴を捉えやすいと考えられたからである。

3. 想起の声と映像—少年事件報道—

本稿で取り上げる少年事件報道は、2016年8月に東松山市の河川敷で起きた16歳少年殺害事件である（以下、東松山市少年殺害事件）。ここで扱うデータは、2016年8月24日（水）にフジテレビ『ユアタイム』（23:30～）で放送された東松山市少年殺害事件である。この時点では、東松山市の都幾川河川敷で、2016年8月23日に少年の遺体が全裸で砂利に埋まった状態で発見されており、その前日の22日ごろに何者かに殺害されたことがわかっていた。死因は溺死であった。また、知人の携帯に被害者が全裸のまま川で泳ぐ動画が見つかった。8月24日には、16歳少年が警察に出頭し、十数人が警察で事情聴取をうけていた。以下にカット別データを示す⁽⁷⁾。

【表1】フジテレビ『ユアタイム』で放送された東松山市少年殺害事件のカット別データ
「砂利に埋まり…全裸の状態 16歳少年「死因は溺死」」（7分46秒）

メインキャスター＝MC，ナレーションA＝NA，ナレーションB＝NB，ナレーションC＝NC 東松山市少年殺害事件＝被害者，東松山市の都幾川河川敷＝河川敷 川崎市中学生殺害事件の被害者＝川崎市の被害者，川崎市の多摩川河川敷＝多摩川河川敷			
パート	番号	語り手と語り	映し出されている画面内容
問いかけ	1	MC：はい。まずはここで今日のユアタイムトップです。16歳の少年に何が起きたのでしょうか。	スタジオ
事件の概要	2	第一発見者：下をみたら、ここに顔があったんだよ。	第一発見者と河川敷
	3-4	NA：埼玉県東松山市の河川敷で、砂利に埋められた状態で見つかった、16歳の少年の遺体。	河川敷→被害者写真
知人の話	5	男性：けっこう人数がいるグループっていうのは聞きました。悪いことはしてみたいいな。	記者が男性に電話で話を聞いている映像
殺害事件の概要 川崎市中学生	6-7	<u>NA：指摘されるのは、1年半前、川崎市で起こった、中学生殺害事件との類似性。</u>	<u>川崎市多摩川を上空から撮っている映像→川崎市の被害者写真（スマホ画面を見ている）</u>

コメント 専門家の	8	碓井教授：ある方向に動き始めた時に、ブレーキがかからない。	碓井教授が説明する映像
問いかけ	9-10	<u>NA：またも少年たちの集団心理が、悲劇を招いてしまったのでしょうか。</u> 分析します。	<u>川崎市多摩川の献花写真、東松山市河川敷映像、警察官の映像</u> →河川敷に線香の映像
事件前の被害者の姿	11	(語りなし)動画の音声によるボウリング場のざわめき。	被害者がボウリングしている動画
	12-13	NA:今年三月。友人たちとボウリングを楽しむ、16歳の井上翼さん。明るいその笑顔に、やがて襲いかかる悲劇の予兆は感じられません。しかし。	被害者がボウリングしている動画→被害者がボウリングしている動画(アップ)
事件の概要	14	第一発見者：たまたまここを通ったら、下を見たら、ここに顔があったんだよ。	第一発見者と河川敷
	15-20	NA：埼玉県東松山市の河川敷で、昨日、変わり果てた遺体で発見された井上さん。下半身は砂利に埋まり全裸の状態。目立った外傷はありませんでした。そして今夜、司法解剖により井上さんが死亡したのは22日ごろだったことが新たに判明。死因は溺死で警察は井上さんが何者かに殺害された殺人事件だと断定しました。	河川敷→搜索映像→河川敷→発見時の様子の図→被害者写真→被害者写真
被害者の友人らの献花、インタビューより被害者の人柄	21-24	NA：今日、遺体発見現場には花を供え静かに手を合わせる井上さんの友人たちの姿が。小学校時代の校長は、井上さんについて、	献花→友人の焼香→友人の献花
	25-26	校長：リーダーというか、楽しい子。ムードメーカー。ほんとに田舎の学校で、あの一、みんな友達だったんです。線香はみんなの分です。	被害者写真→焼香している人
	27-28	NA:去年、埼玉県内の定時制高校に進学するも、11月に退学。その後は、コンビニなどでアルバイトをしてたという井上さん。	被害者写真→被害者写真
	29	女性：けっこう、やんちゃ坊主というか、そんな感じで。でも人懐っこいんで、友達は多かったみたいです。	女性のインタビュー映像

事件の経緯、現在の状況	30-32	NA: こうしたなか、井上さんが事件に巻き込まれたことを示す、新たな証拠が見つかりました。これは、21日の深夜に、井上さんが友人と交わしたラインのやり取りです。	被害者写真→LINEをしている映像→LINE画面
	33	NB: 明日バイトなんだけど、やばい、休んだら首になりそう。も一明日は普通に休んじゃうけどね。骨折って言ったらばれた。一応バイクでこけて怪我したとは言ってる。	LINE画面
	34-48	NA: 22日は、アルバイトをずる休みすることをほのめかしていた井上さん。遺体で発見されたのは、翌日の23日。この間に、いったい何が起きたのでしょうか。遺体発見直後から複数の少年の関与が次々と判明し、事件は急展開しています。今日未明、井上さんの知人で16歳の少年が、父親に付き添われ警察に出頭。事件への関与を認める供述をしています。また、別の知人の少年がラインで、井上さんを暴行して死亡した後に埋めた、という趣旨の話を周囲に伝えていたことも判明。 さらに知人の携帯には、井上さんが、全裸のまま川で泳ぐよう強制されているような動画が残されていました。そして、現在十数人の少年が、警察の事情聴取を受けています。友人によると、井上さんは最近、地元の少年グループとの付き合いがあったと言います。 男性B: 翼のことを嫌っていた人も結構いたんで、パシリで使ってた。好きじゃないけど使えれば一緒にいるみたいな。翼がいないときに陰口を言ってたかな。	被害者写真→被害者写真→河川敷→河川敷→川→河川敷→線香→被害者がボウリングをしている動画→河川敷→警察署→被害者写真→被害者写真→友人から電話で話をきく記者→被害者写真→被害者がボウリングをしている動画
問いかけ	49-51	NA: 井上さんと少年たちのあいだに、何らかのトラブルが起き、それが事件の引き金になったのでしょうか。河川敷で見つかった少年の遺体。そして、複数の少年が関与している可能性。	被害者の写真→河川敷映像→河川敷にある線香の映像

川崎市中学生殺害事件の概要、問いかけ	52-54	NA: <u>思い起こされるのは、去年二月。川崎市の多摩川河川敷で、当時中学一年生だった上村遼太君が、年上の少年グループに殺害された事件です。</u>	<u>多摩川河川敷を上空から撮っている映像→多摩川河川敷を警察官が捜索している映像→川崎市の被害者写真（笑顔）</u>
	55	NC: <u>本当に殺してやるとは思っていない。</u>	<u>多摩川河川敷の捜索映像</u>
	56-62	NA: <u>初公判でこのように話していたリーダー格の少年。少年グループは、上村君を、全裸で真冬の川を泳がせ、交代で、カッターナイフで切りつけ殺害しました。</u> なぜ、殺す気がなかった少年たちは、一線を越えてしまったのでしょうか。少年犯罪に詳しい碓井教授は、	<u>裁判所の映像→裁判所の被告人の席の映像→多摩川河川敷を警察官が捜索している映像→多摩川映像→献花のバスケットボール映像→碓井教授の映像。</u>
専門家のコメント	63-66	碓井教授：ちょっと傷つけてやれ、痛めつけてやれということで始まった行動が、集団のなかでいったんある方向に動き始めると、どんどんその行動がエスカレートしていくということがあります。何か空気に支配されると、そこからは逃げられなくなってしまうのが現代の子ども、若者の人間関係だと思います。	碓井教授の映像→川崎市の被害者写真→川崎市の被害者写真（スマホ画面を見ている）→碓井教授の映像
川崎市中学生殺害事件の被告の証言	67-68	NA: 去年の川崎の事件で、リーダー格の少年は、初公判で、犯行当時の様子をこう話していました。	多摩川河川敷を警察官が捜索している映像→多摩川河川敷を警察官が捜索している映像
	69-71	NC: C君かB君が、泳がせれば、と言った。自分は雰囲気いいねと、なんとなくその場の流れだった。BとCがいたのが大きい。気持ちが大きくなった。その場の雰囲気というか。BとCがいることで、後に引けなくなった。自分が巻き込んでしまった。	初公判のイラスト→多摩川河川敷の映像（画面が揺れているので、河川敷を歩いているような感覚になるような映像）→初公判のイラスト
専門家のコメント	72-77	NA: 口から出たのは、雰囲気と言う言葉。雰囲気に支配された少年たちは 突き動かした集団心理とは。 碓井教授：人間関係能力が弱っているということです。雰囲気だとか、ノリだとかいう言葉を使うんですが、ここから先いったらまずいぞという気持ちはあるんですけども、それよりはみんなと同じことをしなければならない（以下、省略）	多摩川河川敷の映像（川から献花へ）→初公判のイラスト →碓井教授の映像→水たまりに太陽（空）と影が移っている映像→人々が行きかう映像→人々が行きかう映像

問 い かけ、 ま と め	78-81	NA：上村くんの事件からおよそ一年半。井上さんの身に何が起こったのか。そして少年たちは、どのように関与したのか。事件の全容はまだ分かっていません。今夜、井上さんの父親は、大切な息子がこのようなことになってしまい、家族一同、今は大変動揺しており、深く悲しんでいます、とのコメントを出しました。	川崎市の被害者写真（笑顔）→東松山市の河川敷（被害者が埋まっていた場所）の映像→東松山市の河川敷（被害者が埋まっていた場所）の映像→被害者写真→被害者写真
現 在 の 状 況	82	MC：はい、警察によれば現在10人以上、聴収してるってことで、友人関係含め、いろいろこれから明らかになってくると思います。	スタジオ

この報道は、東松山市の少年殺害事件であるが、カット番号6-7においてナレーションが「指摘されるのは、1年前、川崎市で起こった…」と語ることで、一年半前の川崎市の少年による殺害事件の想起を促す。同時に、川崎市の事件の映像（現場と被害少年）を映し出す。続いて、カット番号9-10では、ナレーションの「またも少年たちの集団心理が、悲劇を招いてしまったのでしょうか」という語りと共に、多摩川河川敷の献花写真、東松山市河川敷映像、警察官の映像が同時に映し出される。

カット番号52で、「思い起こされるのは、去年二月。川崎市の多摩川河川敷で、当時中学一年生だった上村遼太君が、年上の少年グループに殺害された事件です」と再度視聴者の想起を促す。映像は、多摩川河川敷の現場と警察官が捜索している映像、被害少年の写真の再提示（笑顔の写真）である。カット番号55-62でも、川崎市の事件の概要が語られると同時に、川崎市の事件当時の河川敷の映像が次々と提示されている。

カット番号78-81は、本報道のまとめ部分であるが、映像ではカットをクロスさせることにより、二つの事件を重ね合わせようとしている。カット番号78のナレーションの語りを聞くと、事件の詳細がまだ明らかになっておらず、川崎市の事件の映像も今回の事件の代用（穴埋め）として用いられたことがわかる。今回の事件の詳細はまだわからないにもかかわらず、一年半前の川崎市の事件を想起させることで、視聴者を同様の少年事件のパラディグムへと位置づけることになるのである。

今回の少年事件では、「河川敷」「強制的に泳がせる」という要素のために、川崎市の事件だけが強調された嫌いがあるが（マスメディアも忘却するのである）、類似の事件は過去にもいくつか存在している。事件によっては、類似の事件の「年表」を提示する場合もあるが、速報性を重んじると、年表作成まで至らない場合も多いものと思われる。そしてそれ以上に、年表は、限られた時間枠での説明が難しいし、手短かに説明した場合には十分な想起効果を挙げられない。ナレーション（声）による想起と、映像による想起がここで用いられる手段だということが確認できるとともに、年表（＝文字）が想起の手段として二次的、場合によっては逆効果であるという点に注目するべきだろう。

文字が想起に対して対立的な役割を演じると考えるならば、プラトンを含む西洋哲学の伝統を「音声中心主義」として位置づけたジャック・デリダの議論⁽⁸⁾に近づくことになる。音声中心主義は、声が一次的であり真なるもので、文字はそれの書写・模像に過ぎないとする思想である。いまここにある真なるもの＝現前の優位性を解体・逆転することが最初期におけるデリダの哲学的課題であった。想起としての声・映像への対抗的な力を構想するならば、文字の役割を考察することが必要になるだろうが、この点の考察については稿を改めることにしたい。

4. 物語共同体とは何か

デュルケムの集合意識の概念を発展させた「集合的記憶」について考察を行ったモーリス・アルヴァックスは、個々人の記憶が共同体の記憶の記憶に格納され、あるいは引き出されると考えた⁽⁹⁾。そこでは記憶 (*mémoire*) は「思い出 (*souvenir*)」として共有されることになる。このような思い出は、知覚の連鎖ではなく、自伝的記憶やエピソード記憶であり、事象や出来事連鎖についての類型化されたパタン、すなわち物語構造を有することになるのである。

テレビは、このような観点からすると、集合的記憶＝想起の装置だといえるであろう。そこでは、声と映像とが格納された記憶を呼び起こすことになる。しかし、集合的と呼ばれるように、呼び起こされるのは、自身の経験ではない。想起されるのは、自身の経験のパラディグムであり、それ自体は経験されていないものであるか、経験されていたとしても内容を失ってしまった痕跡である。パラディグムも痕跡も、それ自体では整型されているものではない。物語として構造化されたものが集合的記憶として想起されることになる。集合的記憶論を出発点にして国家や民族の「捏造された記憶」を検討するアンダーソンやアスマンの研究⁽¹⁰⁾は、国家と民族の物語の生成を述べる。テレビもまた、集合的記憶として、忘却の想起の間に物語を挿入する。と同時に、視聴者を一個の物語共同体として構成していくことになる。

別稿⁽¹¹⁾でも述べたように、教育物語は、視聴者にとっての共通の体験（子ども体験・学校体験）に基づくだけに、より強固な集合的記憶を作り上げることになる。教育物語は、単純化され単一の視点からの物語として視聴者に提供され、視聴者にカタルシスをもたらす。とはいえ、別の事件報道が始まると視聴者は、物語の細部を忘れ、物語の骨組とカタルシス経験だけを記憶する。そして、ふたたび同様の事件が起こると、声と映像により想起の儀礼がなされ、物語が再度姿を現すのである。アルヴァックスのいう集合的記憶は、物語的な経験と呼び起こすのであり、同時に視聴者を物語共同体というものに巻き込んでいるということが言えるであろう。

注

- (1) プラトン『パイドロス』藤沢令夫訳，岩波文庫，1967年，pp.134-135.
- (2) ジョン・フィスク、ジョン・ハートレー『テレビを〈読む〉』池村六郎訳，未来社，1991年，229頁．なお、当該箇所ではフィスクらは、プラトンに言及しているわけではない。分析は全体として羅列的でアドホックである。
- (3) ダニエル・ブーアスティン『幻影の時代 マスコミが製造する事実』星野郁美・後藤和彦訳，東京創元社，1974年；ジャン・ボードリヤール『シミュラクルとシミュレーション』竹原あき子訳，法政大学出版局，1984年。
- (4) ロラン・バルト『神話作用』篠沢秀夫訳，現代思潮新社，1967年。
- (5) ジークムント・フロイト「マジック・メモについてのノート」竹田青嗣編『自我論集』中山元訳，筑摩書房，1996年，pp.306-12．なお、『フロイト全集18 1922-24年』（新宮一成編，岩波書店，2007年）では、Wunderblockは「不思議のメモ帳」と訳されているが、流通している訳語であるかどうか以前に、適訳とは考えにくいものだったので採用しなかった。
- (6) 加藤隆雄・紅林伸幸・越智康詞・酒井真由子「擬似出来事の世界作用とその〈外部〉—テレビにおける教育報道の脱物語化—」南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編，第12号，2016年，pp.37-52；加藤隆雄・酒井真由子「物語型権力と交渉的解読空間—教育世論の脱物語化にむけて—」南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編，第13号（印刷中）。川崎の事件報道については、酒井真由子・越智康詞・紅林伸幸・加藤隆雄「テレビのメディア・バイアスと教育世論の形成—教員報道／少年報道から見てくるもの—」『信州大学研究紀要』，2016年，pp.27-47。
- (7) カット別データの記述法については、酒井真由子他，2016年を参照。
- (8) ジャック・デリダ『声と現象—フッサール現象学における記号の問題への序論』林好雄訳，筑摩書房，2005年．『グラマトロジーについて 上・下』足立和宏訳，1972年，現代思潮社．『エクリチュールと差異』合田正人・谷口博史訳，法政大学出版局，2013年。
- (9) モーリス・アルヴァックス『集合的記憶』小関藤一郎訳，行路社，1989年。
- (10) ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石隆・白石さや訳，書籍工房早川，2007年．アレイダ・アスマン『想起の空間—文化的記憶の形態と変遷』安川晴基訳，水声社，2007年。
- (11) 加藤他，2016年。

本研究は、科学研究費（基盤研究（A）課題番号25245075「テレビメディアにおける言説・映像空間の特性と教育世論の形成に関する実証的研究」平成25年度～29年度）の助成を受けている。